

# Manus 1.6 Deep Dive Intelligence Report

自律型AIエージェントの進化、  
アーキテクチャの深層、  
そしてエンタープライズ運用の現実

[STATUS: CLASSIFIED BRIEFING]  
[TARGET: CIO / CTO / AI\_LEADS]  
[DATE: Q1 2026]

# 技術的飛躍：3つのコア・アップデート



## 1. Max Agent

計画立案・問題解決アーキテクチャの全面刷新。二重盲検テストでユーザー満足度が19.2%向上。

agentProfile: manus-1.6-max



## 2. E2E Mobile Dev

プロンプト入力からテスト環境・ストア公開までのパイプラインを直結。

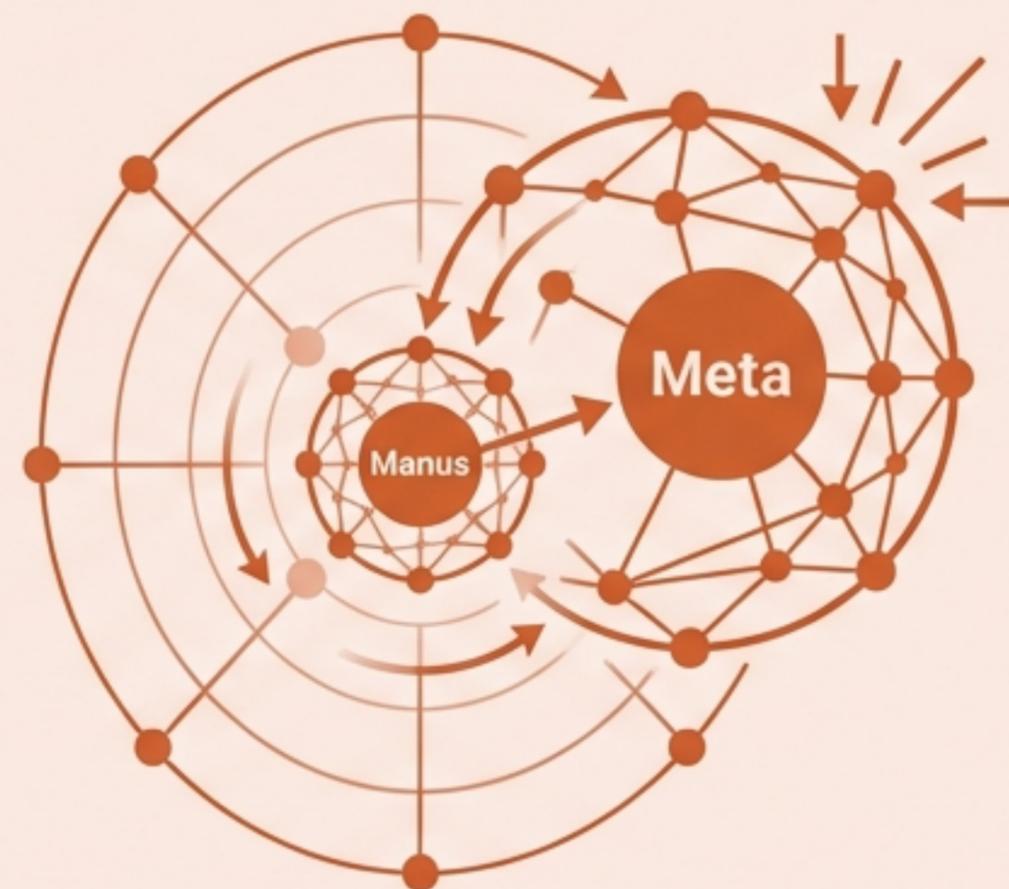


## 3. Design View

生成から精密な部分編集・合成までの視覚的ワークフロー統合。

Powered by: Nano Banana Pro

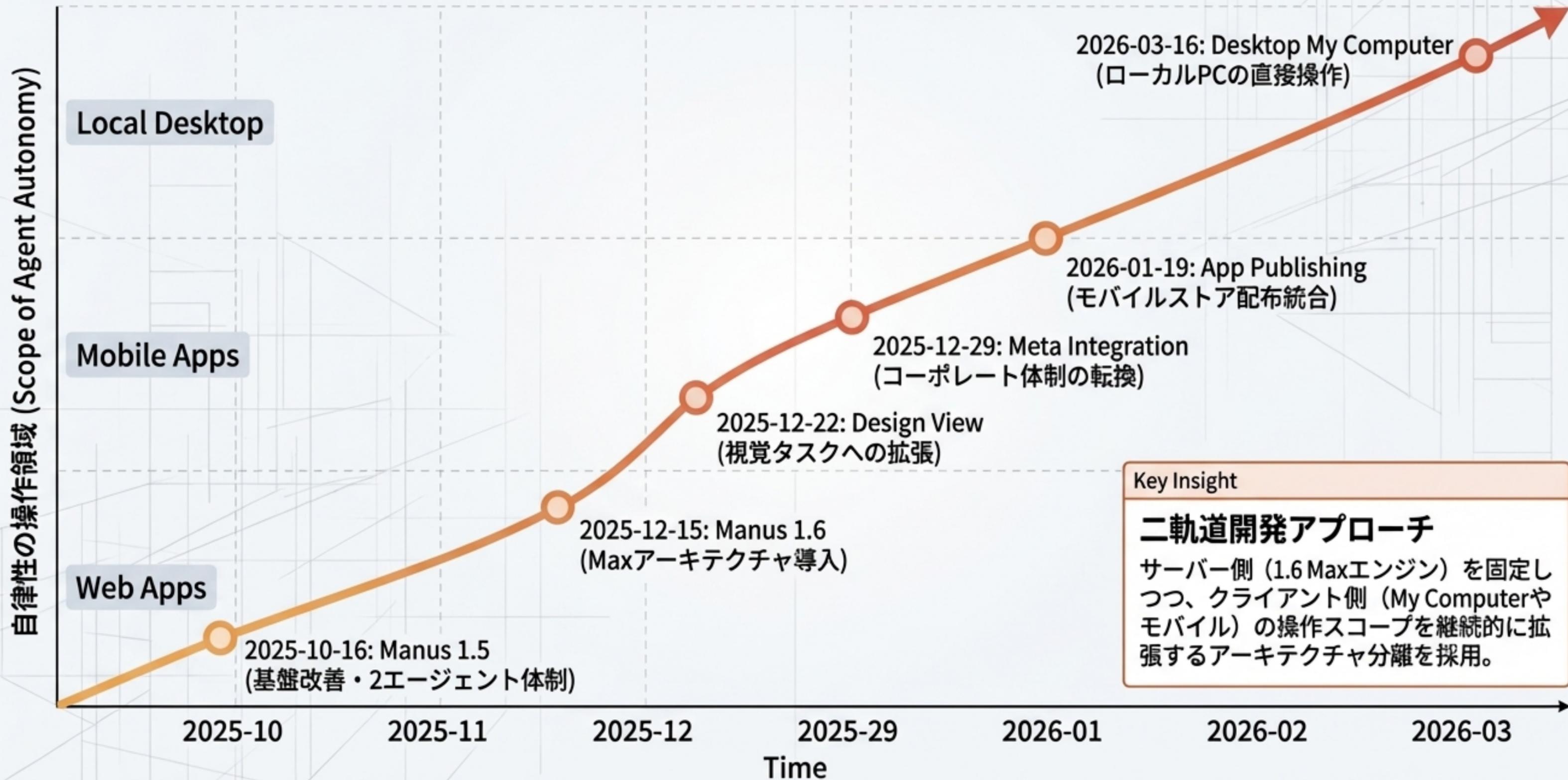
# 環境の激変：The Meta Context



## The Elephant in the Room: Meta合流とガバナンス

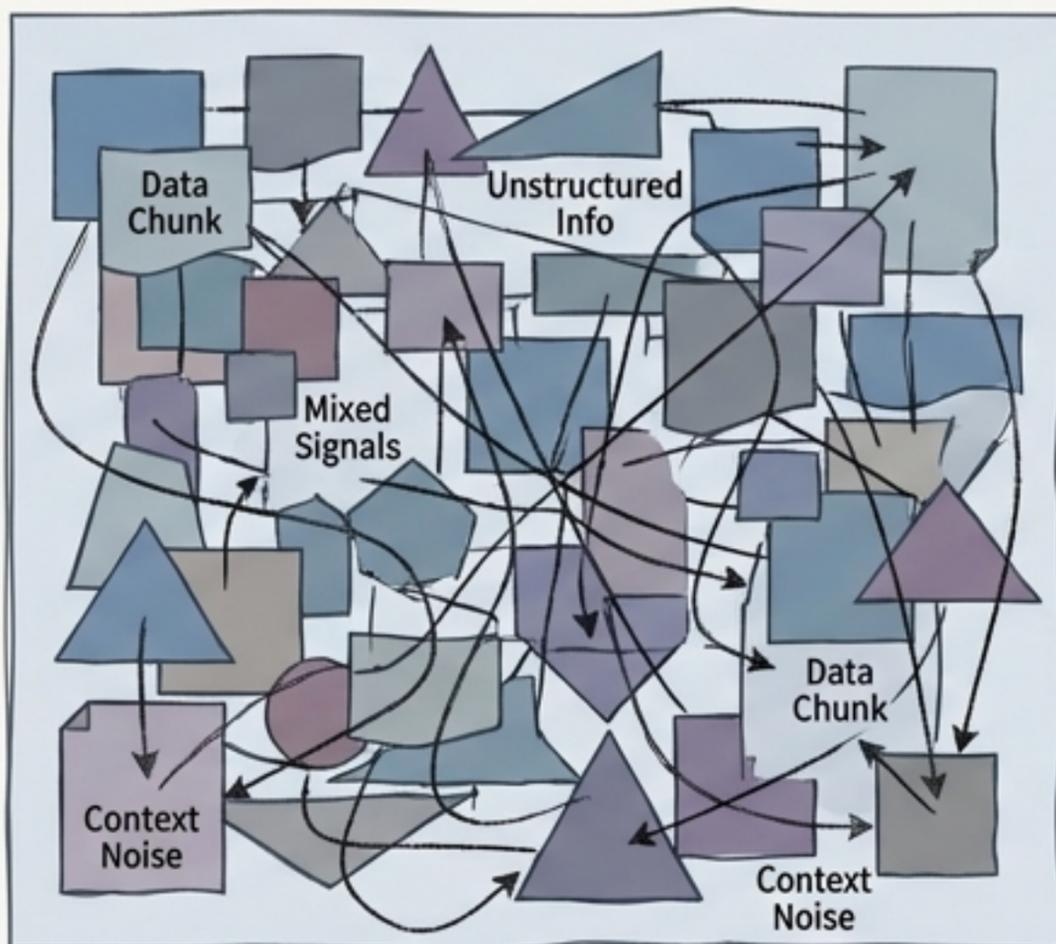
2025年末のMeta社への合流発表。技術の進化と並行して、地政学リスクおよびデータガバナンスの監視がエンタープライズ導入における必須要件に。

# 自律性の拡張軌跡：WebからローカルPCへの浸透



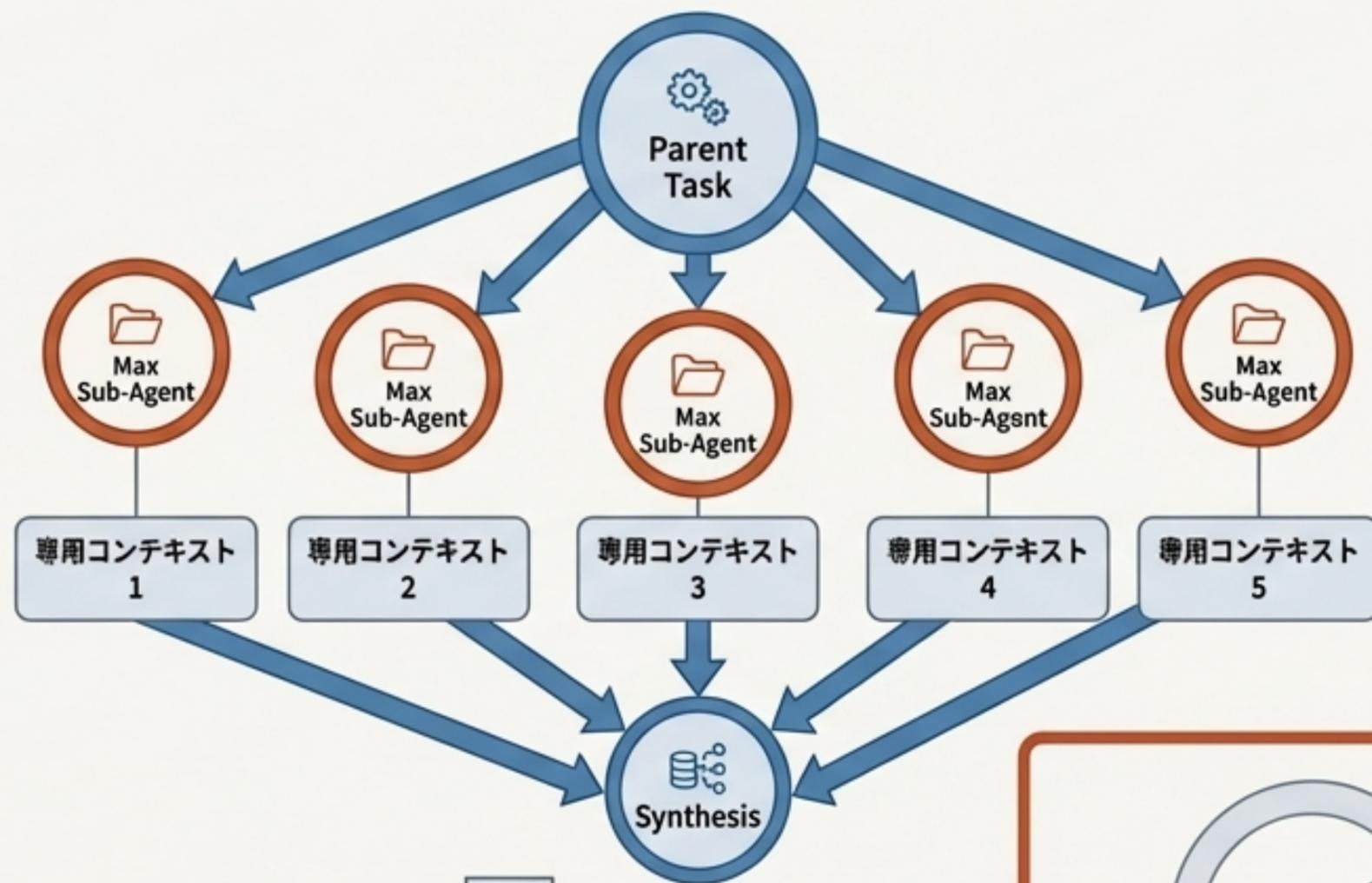
# Maxエンジンと「Wide Research」の並列アーキテクチャ

## 従来型 (Giant Context)



全情報を単一の巨大コンテキストに詰め込む。  
ハルシネーションと文脈消失のリスク大。

## Manus 1.6 (Divide & Parallelize)



多数の独立エージェントが専用コンテキスト  
を持ち並列動作。深さと精度を両立。

**[RESOURCE LIMITATION ALERT]**  
Wide Researchタスクにおけるクレジット消費は「上限50」にシステム制御される。無制限の展開を防ぐ運用上のボトルネック。

# ラストマイルを繋ぐモバイルE2E開発パイプライン

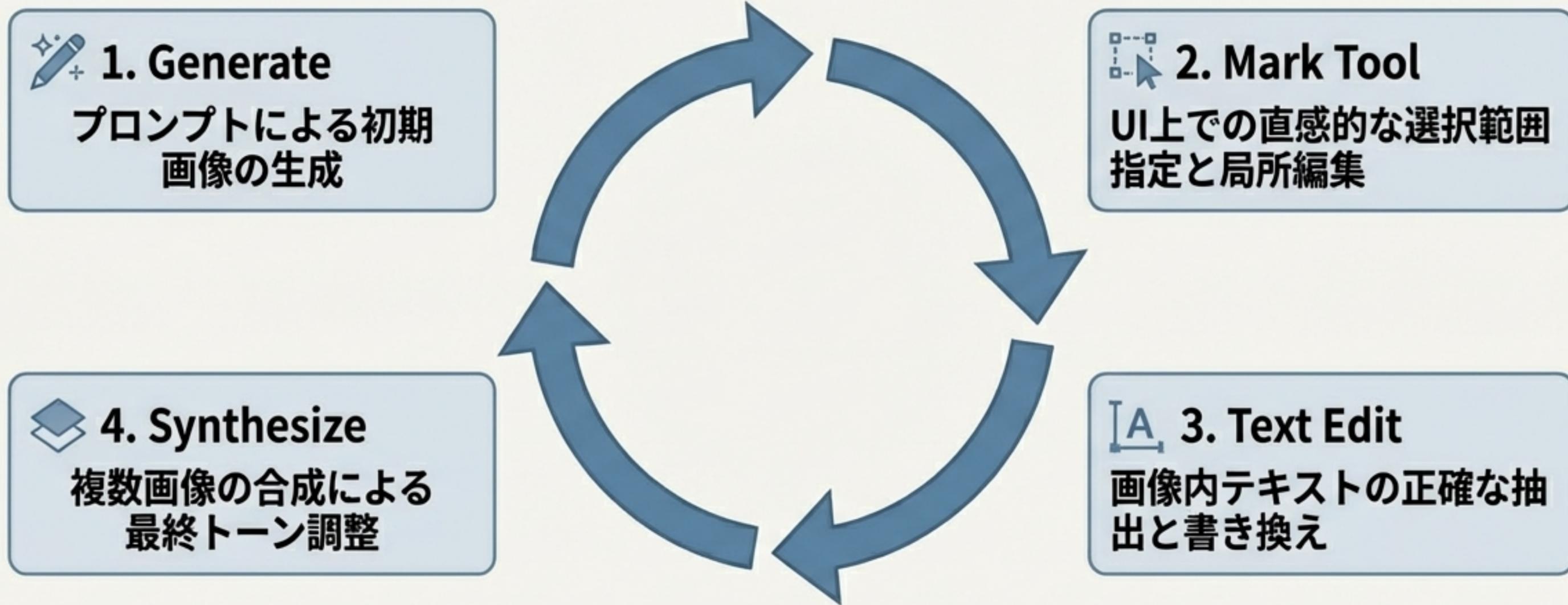


## 自動化の境界線 (The Automation Boundary)

「生成して終わり」ではなく「配布基盤へのアップロード」までを自動化し、ラストマイルの摩擦を劇的に排除。ただし、最終ビルドの署名や各ストアの厳格な審査要件には、依然として人間側の検証・介入プロセスが不可欠となる。

# Design View：単発生成から「精密編集ループ」への移行

[POWERED BY: GOOGLE NANO BANANA PRO]



パラダイムシフト: プロンプトエンジニアリングへの依存を脱却。  
GUIによる「作ってから直す」視覚的フィードバック・ワークフローをプラットフォーム内に完全統合。

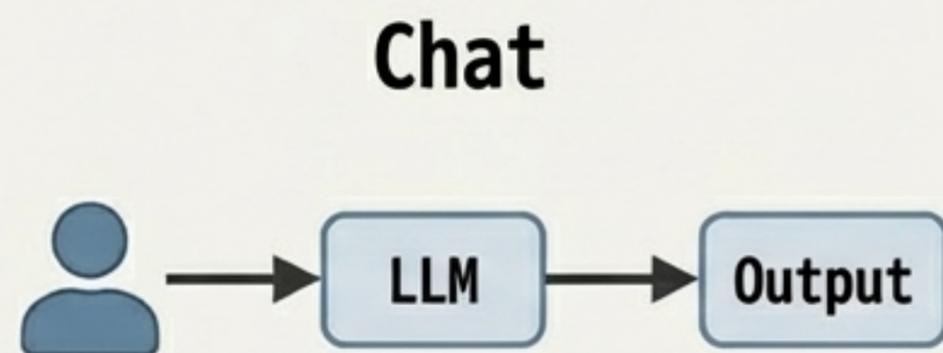
# オムニチャネル展開：エージェントの遍在性マトリクス

カテゴリ	環境・OS要件	展開形態
 Mobile / Tablet	<ul style="list-style-type: none"><li>• [iOS/iPadOS 17.0+]</li><li>• [Android]</li></ul>	アプリ上でのネイティブ自律実行 (Play Console AAB配布連携)
 Desktop / OS	<ul style="list-style-type: none"><li>• [macOS 14.0+ (M1+)]</li><li>• [Windows]</li><li>• [visionOS 1.0+]</li></ul>	「My Computer」によるローカル PCファイル・システム直接操作
 Browser	[Browser Operator]	既存のログインセッション・ ローカルIPを活用したブラウザ拡張 (※人間の監視推奨)
 Messaging	<ul style="list-style-type: none"><li>• [WhatsApp Business]</li><li>• [Telegram]</li></ul>	特定チャットに限定された VMサンドボックス内での隔離実行

ユーザーがどのデバイス・環境にいても、コンテキストを維持したまま  
同一の「1.6 Maxエージェント」をシームレスに呼び出せるインターフェース網。

# 開発者エコシステム：非同期タスクAPIと「48時間の壁」

同期チャットから状態遷移タスクへ



Asynchronous State Machine

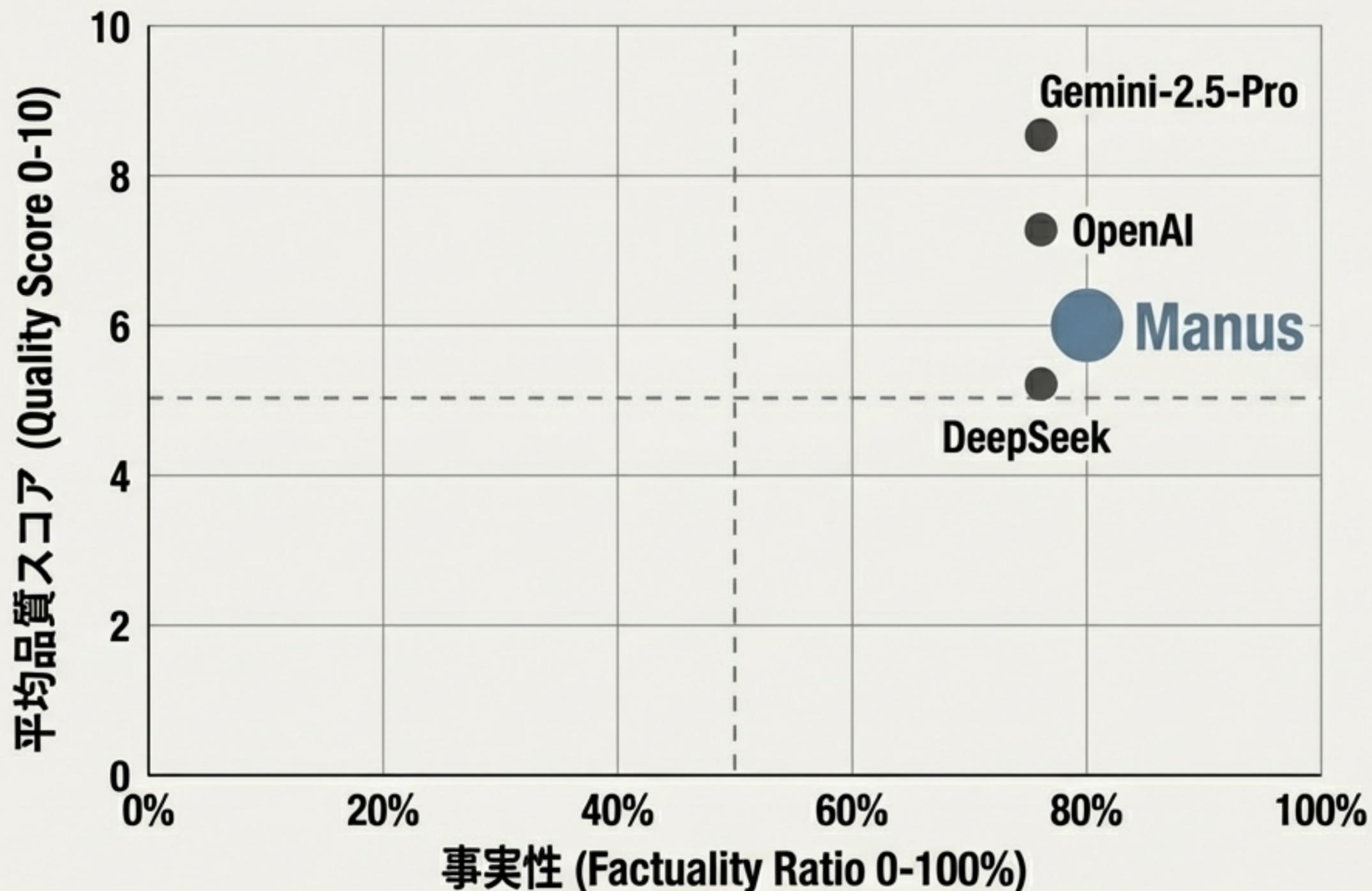


## The 48-Hour Retention Constraint

```
Terminal
> SYSTEM_WARNING: FILE_RETENTION_POLICY
> ALL UPLOADED/GENERATED FILES DELETED IN: 48 HOURS
```

アーキテクチャ上の絶対制約：  
セキュリティとデータ最小化の観点から、  
ファイルは48時間で自動消去される。  
長期プロジェクトでのAPI連携においては  
「成果物の外部ストレージへの即時転記・  
保存フロー」の自前構築が必須となる。

# リアリティチェック 1：第三者評価における特異なポジショニング



## インサイト分析:

DeepResearchEvalベンチマークにおいて、Manusは事実性（ハルシネーションの少なさ）で82.30%という最高値を記録。一方で、出力の総合的な品質スコアは他社フロンティアモデルに劣るという「極端に特化した」ポジションにある。

[NOTE: DATA COLLECTED AUG-SEP 2025. LIKELY PRE-DATES 1.6 MAX ARCHITECTURE]

# リアリティチェック 2：実運用の摩擦とHuman-in-the-Loop

## Browser Operator (ブラウザ自律操作)



予期せぬDOM操作やエラー展開によるデータ損失リスク。



完全放任は不可。「新しいタブでの実行」と「人間の継続的な監督（監視）」がシステム運用上の公式要件。

## Mobile E2E Dev (モバイルアプリ開発)



生成コードとローカル環境変数・Gradle差分によるビルドエラーの頻発（コミュニティ報告）。



自動化はアップロードまで。最終的なビルド解決と署名プロセスにおけるエンジニアの介入ポイント設計が必須。

## Billing & Privacy (課金とアクセス権限)



Wide Researchのクレジット大量消費、および公開リンク(share\_url)設定ミスによる機密データ漏洩リスク。



チーム運用時の厳密なアクセス権限（Owner/Admin監査）の統制と、公開設定のデフォルト無効化ルールの徹底。

# エンタープライズ・セキュリティと監査アーキテクチャ

## Standard Operations Layer (一般業務フロー)

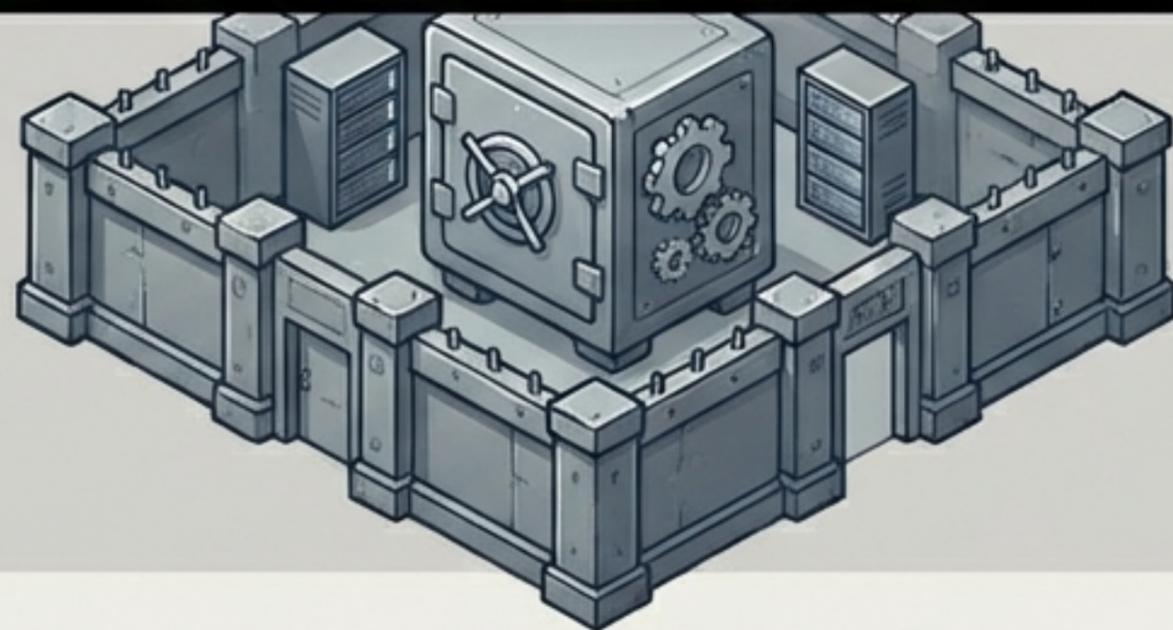
- WhatsApp等の統合は隔離されたクラウドVM (サンドボックス) で実行。
- データ最小化の原則に基づく48時間でのファイル完全破棄。
- SOC 2 / ISO 27001 準拠方針。



## Strict Architectural Isolation (アーキテクチャレベルの完全分離)

## Audit & Compliance Layer (監査・ガバナンスフロー)

- 一般タスクAPIとは構造的に分離された承認制アクセス。
- Enterprise Data Export API (eDiscovery対応)。
- 無期限保持ではなく、監査用の「制御された一時アクセスURL」を発行するセキュアな設計。



業務利用のエンドポイントと監査対応 (eDiscovery) のエンドポイントを根本から分離し、シャドーIT化を防ぎながら法的要請に応えるエンタープライズグレードの基盤。

# コスト構造と「Use it or Lose it」の課金メカニクス

## Free

- 毎日300クレジット付与。
- Agent Modeは1.6 Lite限定。

## Pro

- 月額\$20 / 4,000クレジット～。
- 全エージェント(Max含む)アクセス可。

## Team

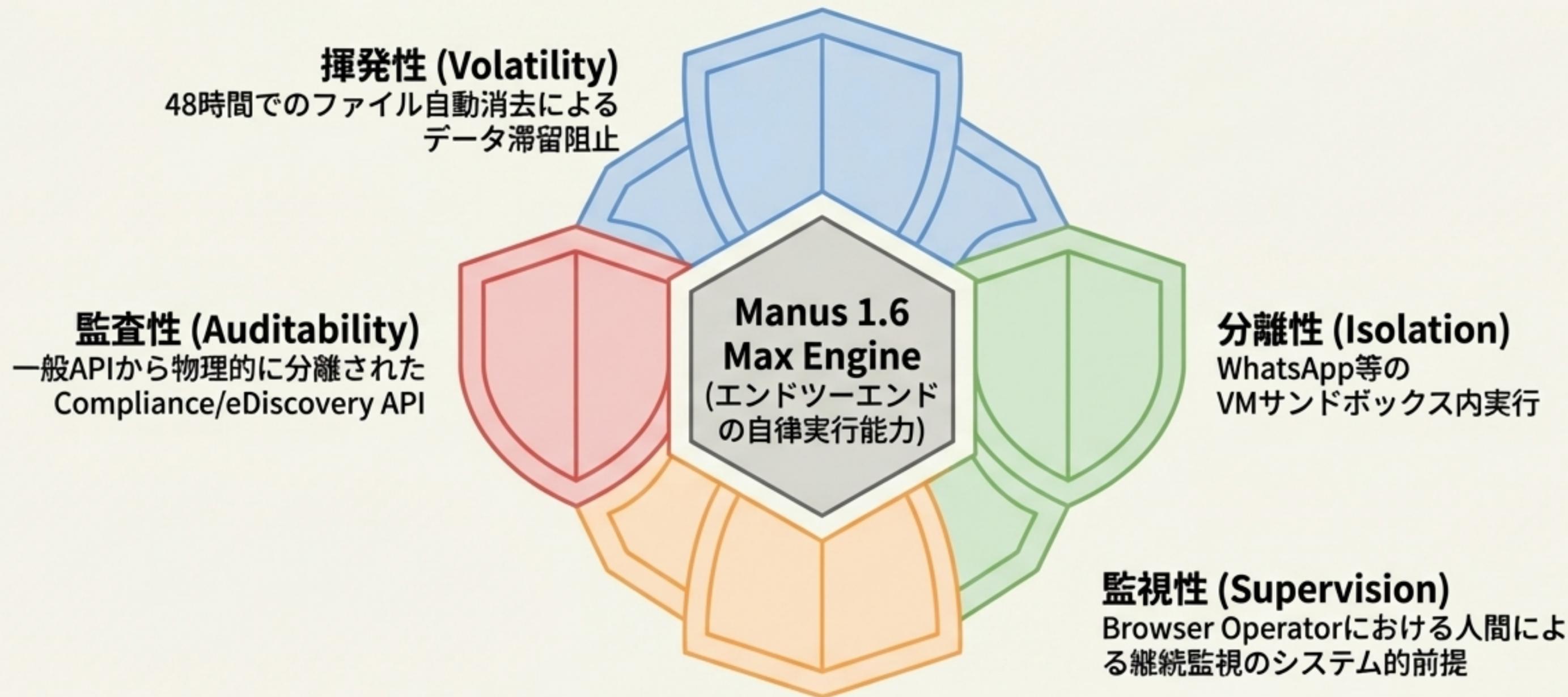
- 1席あたり月額\$20～。
- Ownerによるセッション監査権限付き。



### 厳格なりセット仕様と運用上の必須要件：

未使用クレジットの次サイクルへの繰り越しは一切不可 (UTC+0基準で完全消滅)。チーム導入においては予算を無駄にしないための「毎月の厳密なクレジット消化計画」と、高コストなWide Researchタスク (最大50消費) 実行前の「事前承認フロー」の策定が不可欠。

# SYNTHESIS：完全自律ではなく「統制された自律（Governed Autonomy）」へ



コア・インサイト: Manus 1.6の本質は、「AIに全てを任せる」ことではない。エンタープライズが許容できるレベルの『人間の介入点』と『データの揮発・監査レイヤー』をシステムの中核に組み込んだ点にこそ、最大のパラダイムシフトがある。

# 最終展望：出力の所有権と人間の「最終責任」



**Manus AI**  
(Tool & Capability)

- Input/Outputの所有権を一切主張しない。
- 非識別化データとしての利用可能性。
- ツールの提供者としてのポジション。



**Human User**  
(Ownership & Liability)



- 生成された全資産（コード、アプリ、画像等）の完全な所有権。
- **[警告]** AI生成物の非一意性、および第三者の知的財産権侵害に対する**最終的な法的・賠償責任**を完全に負う。

## 結論 (Conclusion):

Metaという巨大なエコシステムへの合流を経て、Manusは「個人の作業代替ツール」から「企業統治下で運用される自律インフラ」へ変貌し変貌しつつある。我々に求められるのは、AIの能力を測るだけでなく、それを安全に囲い込む『ガードレール的设计力』である。